

《論 文》

文章と談話における引用表現

—随筆と雑談・相談を例として—

立 川 和 美

On Quotation in Japanese Text and Discourse

KAZUMI TACHIKAWA

キーワード

随筆 (Japanese Essay), 文章 (Text), 談話 (Discourse), 引用 (Quotation)

1. はじめに

引用表現については、欧米の言語学や文体論の領域において、文章、とりわけ小説というジャンルの「話法」をめぐる研究が盛んに行われてきた。また、日本語学の領域においては、文法的な問題として取り扱われることが多かった。本稿では、これらをふまえ、文章・談話という言語単位から見た引用表現について考えてみたい。

具体的には、文章と談話のデータを通して引用の用法を観察し、それぞれの引用の機能の特徴を対照的に考察する。また、コーパスとしては、談話に関しては、やりとりが緊密に結びついているという性格から引用が行われやすい「雑談」と「相談」を、文章に関しては、談話に近い性格を持つと考えられる「随筆」を分析対象としたい。

1. 1. 文章・談話が持つそれぞれの特徴

文章は文字言語（書きことば）、談話は音声言語（話しことば）と捉えるのが一般的だが、両者の違いは、単に文字か音声かの違いではなく、様々な表現性に関わるものと考えるのが適切であろう。たとえば、談話が文字化された演

劇の台本や、文章が音声化したニュースなど、音声と文字の両方に関わるジャンルがある他、文体という観点からみると、文章の中でも手紙や日記といったジャンルは談話に近い。さらに、場のあり方や改まり方など、使用される状況によって、文章と談話それぞれのジャンルも多岐に分割される。このようなことから、文章と談話とは相互に連続的な部分を持っていると見ることができる^(注1)。

時枝誠記は、文章とは、その前後に文脈の連続を想定することのできない、それ自身で完結し統一した表現であると規定し、文章表現については根本的に「時間的・継時的・線条的」な性格を認め、そしてその構造は「展開的」なものだと考えた^(注2)。こうした文章の持つ典型的な特徴としては、空間性や永続性が挙げられるが、その他に表現の正確さや適切さ、論理的一貫性も要求される。加えて、複雑な文構造や修辭的表現、難しい改まった言い回しが用いられることなどもある。また、歴史的には、もともと文字を駆使できる特別な階級の人々のものであることから、権威をもった標準としての体裁を持っている^(注3)。

一方、典型的な談話は、時間性が強く、永続性はない。また身振りや表情、環境などの外的要素によって表現や理解が補助されるところも

大きい。文は比較的短く、「繰り返し」や、「言い間違い」、「言い淀み」などの冗長な表現が見られる一方、「縮合形」、「縮約形」、「省略」も多い。文章に比較して「倒置」、「指示語」や「接続詞」、「応答詞」や「終助詞」もしばしば見られる。ただ、談話の中でも、雑談の類は個人性や直接性が強く、整った語形、語彙、構造などを伴うものとは言い難いが、口承文学などは、一定の形式に則って伝えられるといったように、談話というジャンルの中でもかなりの差がある。

1. 2. 文章と談話における引用と話法

引用と話法との区分設定は研究者によって様々であるが、ここではまず、話法と引用、そして引用の標識とされている格助詞「と」についてまとめておきたい。

砂川（1989）では、引用は引用句の「と」を受ける形式に限定されており、話法はもっと広い領域に及ぶもので二重の「場」に関わる表現だと考えられている。また藤田（2000）では、文法論としての引用研究において、「話法」に関する論と、文中引用句「と」を中心とする「引用のシンタクス」の論とを議論しているが、引用の「と」は副詞節を導く「様態、状況」を示す助詞と見ている。鎌田（2000）では、「引用は『と』を伴って行われることもあるが、『と』を伴わないで行われることもある」として、日本語の引用について広く様々なパターンを考えている^(注4)。

ところで、文章の引用部分には通常「」をつけるが、テキストをある意味すべて引用によって相互に関係づけられている（間テキスト性）ものと考えた場合、「」が引用という現象を強く明示することから、本来大部分が引用によって構成されているテキストの特定の部分を焦点化することによって、叙述に差異性を示す符号であると見ることもできる。

この他「」は、小説などにおける直接話法の表示手段としても認められている。談話であれば、元発話を直接引用するときには、音声で

最大限に駆使することで生き生きとした表現が可能となるが、文章においては表記上の工夫をいくら凝らしても限界がある。そうした中で、「」という符号とそれに続く伝達動詞は、内容に具体性を加え、そうした工夫を凝らして伝達しようとする書き手の存在を読み手に強く意識させる。

これに対して、「」のない間接話法や、主節や伝達動詞も存在しない自由間接話法は、書き手の存在を意識させずに引用内容を直に読み手に示すことができるという特徴を持つ。今回の分析対象である随筆は、書き手が自らのことを語ることが多いため、主観的な想念や心内語を効果的に表現する上で、この話法は有効な手段として機能すると予想される。

1. 3. 引用のマーカー格助詞「と」の語誌

本節では、文章・談話の両方において引用の標識とされる格助詞「と」の語誌についてまとめておきたい。

まず、格助詞「と」は、『日本国語大辞典第二版』では、大きく「①連体関係を表すもの」と「②連用関係を表すもの」に分けられ、②の下位分類として引用を表す機能が示されている。また松村他編（1969）では、格助詞「と」に独自の用法として引用の「と」を挙げているが、さらに「引用の『と』では（中略）、引用部分が一言相当の資格を持つと考えることができる」との指摘がある。ここから、先に引用した『日本国語大辞典第二版』における②の下位分類として提示されている「体言を承けてそれを状態性概念とし、また擬態語を承けて状態性副詞を構成し、動作概念を修飾する。体言を承けた場合、比喩的修飾となることがある」という機能もまた、引用と密接に関係するものと考えることができる。

このほか、橋本（1969）は、「と」の連用的用法として引用の様々な側面を示しており、いわゆる典型的な引用のほか、「副詞的修飾語を作るうち、『の如く』の意味になるものがある」というタイプを挙げている。これも、引用

が比喩表現に転ずる場合に言及したものである。また大野他(1977)では、「と」について、「体言および体言の資質を持つ語、引用文などを受け、その内容を指示して下の用言に続ける」として「①『見る』『思ふ』『言ふ』『聞く』『知る』『す』などの動詞の内容を提示する。他人の言葉や伝聞などを引用する場合もある」とするほか、「④比喩を示す」場合も挙げている。このように、文章・談話における引用の「と」は、比喩的な機能をも持ち合わせているということが分かる。

引用を行う場合は「と」という助詞は必須ではないが、格助詞「と」の中核的な役割の一つが引用であることは間違いない。また引用の標識としての「と」が果たす役割は大きい。そこで本稿では、以下、引用マーカーとしての「と」に着目し、その様々な用法を考えていくことにする^(注5)。

2. 文章に見られる引用の諸相 —随筆テキストを用いて—

今回、随筆を分析対象とした理由の一つは、その内容が小説的なものから評論的なものまで幅広く、かつ日本語特有のジャンルであるためである。随筆は西洋のエッセイとも類似点を持つが、日本文学の古典からの歴史を持ち、日本語テキスト固有のジャンルである。本節ではこのジャンルを分析し、書きことばの引用の在り方を整理したい。

2. 1. 古典随筆に見られる引用 —『枕草子』を例に—

まず、古典随筆の例として『枕草子』をとりあげる。この作品は、作者である清少納言の独り語りであり、作品の中には、会話や心中語、和歌、手紙など、さまざまな引用が行われている。たとえば竹村(2003)は、132段「円融院の御果ての年」に見られる「語り」について、「藤三位という上臈女房の身の上の出来事を託した聞き書き」ではあるが、言語主体の「出来

事の主と同化」したスタイルだと指摘している。つまりこれは、清少納言が伝聞したエピソードを引用するという語りの過程において、他者の出来事を自己のものへと変化させているということを表すものといえよう^(注6)。こうした表現活動と引用との関係は、現代語の文章・談話にもあてはまるものといえるのではないか。『枕草子』は、語りという側面において口語(談話)的な性格を持つ一方、文章のジャンルとして現代語の随筆(文章)につながる性格をも持つユニークな作品だといえることができるが、本節では、古典随筆という文章に特有な引用の様相に着目したい。

さて、一般的に古典作品における引用の研究としては、引き唄や和歌に関するものがある他、『枕草子』に関しては漢詩文の引用などがとりあげられているが、テキスト内の「話法」が議論されることは少ない^(注7)。その理由の一つとしては、「」が不在の古典作品では、引用部分の認定が難しく、地の文と会話文との差が明確でないため、現代の読者にとっては厳密な一定の解釈が必ずしも約束されないことがあるだろう。たとえば発話部分については、「と」「とて」「など」といった引用表現や、それに続く「言ふ」「聞こゆ」「宣ふ」といった発話動詞、敬語表現の用い方や、終助詞、感動詞の多用などの話し言葉特有の文体へのシフトなどが、認定の手がかりとなる。しかし、とりわけ随筆のような語りの要素が強いジャンルでは、地の文との区別が難しい場合が多く、実際には発話されることのない心中語の引用の認定はさらに難しくなる^(注8)。

そこで本節では、引用の「と」と「など」を中心に古典の引用形式を検証し、多岐にわたる現代語の引用形式の起源の一端を探っていきたいと思う。以下、第二十一段を対象に、注目すべき項目別に引用表現を整理していく。

*心中思惟の引用における「など」「と」

(例1) いかばかりなる人、九重をならすらん、
など思ひやらるるに(第三段 正月一

日は)

(例2) うたれじと用意して……いみじう興ありとうちわらひたるは、いとはええし。……ねたしとおもひたるもことはりなり。……所につけてわれはと思ふ女房の(第三段 正月一日は)

(例3) やがてぬがせでもあらばやとおぼゆれ。(第三段 正月一日は)

例1は、作者(自己)の宮仕え以前の経験として示された心中思惟で、例3もやはり筆者自身の心中思惟である。内容的に、例1は遠い過去に常々そう思っていた内容を「など」で受け、語り手自身の心中語の一般化が図られているが、例3は語っている内容と同じ時点での思いを明確に提示する場合で、「と」で受けている。例2は、女房たち(他者)の心中思惟だが、実際の発話を引用しているのではなく、あたかもそう言っているように作者に見えただけといった内容を叙述しているという点において、一種の比喩的表現でもあるといえ、連用格と引用格との連続的な用法と見ることができる。

(例4) かうなりけり、と心えたまふもをかしき物の、ひがおぼえもし、わすれたる所もあらばいみじかるべきことととわりなうおぼしきだれぬべし。(第二十一段「清涼殿の丑寅の隅の」)

語りの内部の登場人物(他者)である女御の心中を端的に述べる部分である。これも、あくまでも「こう思ったのあろう」という中宮定子の想像によって引用内容が表現されているが、女御の心中というよりも、想像している中宮定子自身の判断や考えという側面が強く、その意味で引用内容に対して話者の確信がある。こうした場合、「と」が用いられている。

***発言の引用における「」, など, と**

(例5) 「よきに奏したまへ啓したまへ」などいひても、得たるはいとよし。(第三段

正月一日は)

(例6) 困じてうちねぶれば「ねぶりをのみして」などがむるも、いと所せく(第五段「思はむ子を」)

例5, 例6ともに現代における解釈としては一般に「」がつけられるが、現代語のような実際の発話をそのまま写し取って「」を付したいわゆる直接話法ではない。「」は後世に付け加えたものにすぎないことから、筆者の引用の意図に合っているかどうかは不明である。これらの例では、むしろ筆者は、会話という意識を強くは持っていなかったのではないかと予想される。その理由は、たとえば、例5は「など」で内容を要約するという「一般化」の技法がとられており、「そういつているみたい」というニュアンスを持つ点で、比喩的でもある。よって心中思惟を示す例2と同様であるといえる。例6については、実際に「ねぶりをのみして」という発話もあったかもしれないが、同じ趣旨の別の言い回しも併せて見られたということで、それらを総称して「など」でくくっているものだといえる。ここから、現代語の解釈による「」が示す部分とは、情報の出所が書き手自身ではないという程度にとどまると考えてもよいのではないかと推察される。

(例7) 「されどそれはめなれにて侍れば、…見へばわらはむ。」など(私が)いふ程にしも、「これまいらせたまへ」とて(生昌が)御硯などさしいる。(第六段「大進生昌が家に」)

(例7)の冒頭部の定子に対する作者の反論では「など」が用いられ、その内容の主旨が提示されるが、そこに割って入った端的な生昌の発話では「と」が用いられている。また生昌の発話には、「これ」という感動詞が用いられていることから、彼自身の発話をそのまま切り取ったものとはいえないまでも、実際の発話に近いものといえよう。こうした「と」で受ける

叙述の中に、読み手は談話のアクセントや間、声の調子の変化を読み取っていたと考えられる。この段は日記的章段であるが、この後、全て「と」で受けた清少納言と生昌の会話で話が展開していく。会話の応酬といったやりとりの提示には、直截的な「と」を用いるほうが文脈としての流れがよいということも関係しているだろう。「 」がなかった当時は、こうした形で、特に意識をすることなく話法が切り替えられていたと考えられる。

(例8)「似ては侍れど、これはゆゆしげにこそ侍るめれ。また『翁丸か』とだにいへば、よろこびてまうでくるものを、よべどよりこず。あらぬなめり。『それはうちころして捨て侍りぬ』とこそ申しつれ。ふたりしてうたんには生きなんや」と申せば、心憂がらせたまふ。(第七段「うへに候ふ御猫は」)

翁丸という犬が行方不明になった件に関する中宮の質問に対して、右近が細かいいきさつを説明する部分で、現代語の解釈では全てが右近の発話として「 」で括られている。この中で『翁丸か』と呼ぶのは一回性のことなく、右近の話の中の呼びかけと考えるのが適当であることから、具体的な発話としての報告とはいえない。よって、これも話法の忠実な再現ではなく、話している情報が他から得たものであることを示しているにすぎないものと判断できる。また、こうした詳細かつ具体的な内容を持つ説明部分は、第七段の中ではほぼ「と」で受けられており、(例7)と同様に、叙述の引用による展開を持つ日記的章段の特徴が表れている。

*類聚的章段における「と」

(例9) かしこ淵はいかなる底の心を見て、さる名を付けんとをかし。(第十五段「淵は」)

類聚的章段においては、非常に短い端的な内

容を直接に受ける格助詞「と」が頻出し、その後に「をかし」や「心ことなり」などの筆者の感慨が示される例が多く見られた。いずれも、「名詞句+と」の構成において名詞句の事柄をまとめあげる力を持ち、このタイプの章段に特徴的な用法だといえる。

*『枕草子』の「語り」の構造

(例10) (中宮の語り)「村上の御時に宣耀殿の女御と聞こえけるは…(父大臣ガ)「ひとつには御手をならひたまへ…」となん聞こえたまひける、と(村上天皇ガ)きこしめしをきて……(第二十一段「清涼殿の丑寅の隅の」)

清少納言が語る内容中の登場人物の一人である中宮定子の語りの中に、宣耀殿の女御が登場し、さらにその中に父大臣が登場するといった、入れ子型で語りの場が形成されている。『枕草子』ではしばしばこうしたエピソードを示す内容が見られるが、こういった物語と同様の構図の中では、引用内容は簡潔に要点を押さえた形で示されており、引用や話法に特に意識は向けられてはいないという特徴がみられる。

2. 2. 現代随筆に見られる引用—『文藝春秋』の「巻頭随筆」を用いて—

随筆は、自らのことを語るジャンルであるため、談話性を強く帯びており、談話と同様、多くの引用が観察される。以下、本節では、そうした現代語の随筆における引用の多様な機能を記述していきたい。

2. 2. 1. 現代語の随筆作品における引用の例

本節では、現代語の随筆の多様な引用の実際を押さえておく目的で、「秘密のコレクション」(中野翠)の特徴的な引用部分を取り上げて、実例に沿って考察していきたい。(全文は付録1参照)

(例11) たしかに物欲は強いほうだと思う。

……たぶん人間が高級ではないせいだ
と思う。

→ここは「と思う」を省略し、自由直接話法のようにも叙述できるが、自分の考えを客観的、かつ端的に示す用法として「と思う」が付されている。

(例12) もろに、「高級」「贅沢」「リッチ」「ゴージャス」という感じがして、私には妙に恥ずかしい。

→この部分は、「に感じられて」と動詞で表現する場合に比べて、「という感じ」と名詞を用いることで、叙述内容に距離を置く、切り離すという機能が加わっている。このように引用形式を名詞化することで、動詞で表すよりも「コトガラの」(抽象的)になる。

(例13) 私はそういう自分の物欲の形を、『千円贅沢』(講談社'01年秋に出版)という本に書いた。

→ここは本来、「という本」と引用する必要はない部分であるが、読み手にとっては初めての情報であるため、自著に名付けを行い「この本のタイトルは知らなくて当然である」という含みを持たせた、書き手の謙遜が表されている表現である。こうした読み手を強く意識した書き手の配慮や間接的な表現は、随筆テキストにしばしば観察される。

(例14) その店の奥に、長年晒しになっていたとおぼしき、素敵なご飯茶碗の数々を発見したのだ。

→「とおぼしき」は古典系の連句であるが、この表現を用いることによって、文章が持つ独特の雰囲気表わされる。「とおぼしき」という形でしか現代語では用いられない形式は、「おぼす」という古典語から派生して構成されたものである。

(例15) さらにイイのが子供用の茶碗で、稚拙なタッチで赤銅鈴之助やサンタクロ

スの絵が描かれていたりするのだ(サンタクロズと脇に書かれていたのがいいらしい!)

→「サンタクロズ」という部分は、厳密には書きことばを引用したものではあるが、むしろ、忠実に状況を引用し、描写する用法と見るのが適切であろう。

(例16) 店の人は「持っていてくれるだけでありがたい」というふうで、タダ同然の値段だったのだ。

→引用内容は要約されており、他者の行動からそのように見て取れた状況描写であるということ意識して「」を付したものと考えられ、これは前節でとり上げた古典随筆にも見られた手法である。

(例17) こんなばかばかしいものに愛を燃やすのは私達くらいのものだと思い、それがまた楽しかったのだが……世の中にはやっぱり一定数、ものずきはいるらしい。

→ここは「私たちくらいのものだ。」で句点を打って切ってしまうてもよい部分だが、それを地の文で「と思い」と引用の形で続けることで、思っている内容を婉曲に表現している。

(例18) 多くは骨董市やアンティーク・ショップ(というより古道具屋と言ったほうがいいか)で見つけたもの。

→() は、余分な情報であることを示す表記上の工夫であるが、この文章における書き手独特の個性を示す内容であり、またより詳しい叙述を行うための手段としても機能している。「というより～と言ったほうがいいのか」は、形式化した連語的表現で、全体で接続詞的に機能する引用表現だといえる。また「いう」と「言う」に見られる平仮名と漢字の表記は、後者の「古道具屋」のほうに内容の重きをおくために漢字が選択されたと考えられ、意識的な使い分けが行われている。

(例19) ただひとつ、少し意識的にあつめているものがあるのだけれど、これまた「こんなばかばかしいものに愛を燃やすのは私くらいのものか」と思っていたら、いつの間にかコレクターズ・アイテムになってしまった様子なのだ。

→前出の同じ言い回しには「 」が付されていない(例17)が、ここではついている。「これまた」という文脈指示に続けて「 」を用い、引用内容を目立たせて特化することで読み手に注意を促す、更に引用の開始を特定する、といった機能を持たせている。

(例20) 店の電話番号を確認し、電話で聞いてみたら、店はやめることになっているのだが、商品は手放す気はない、見せる気もない——と言い切られてしまった。

→これはテキストの結尾部近くに出現する文であるが、「 」を用いて描写的に書くと結尾部で、文章が拡散してまとまりがつかなくなってしまうという作者の考えにより、「 」は用いられていないものと考えられる。また「 」がなくとも、引用の開始部分は明確である。そこでこうした簡潔な引用内容となるが、これは書き手が産出する時点で全体構成を踏まえて表現をコントロールするといった、文章独自のストラテジーによる引用のスタイルであるといえる。

(例21) 私と同様の問い合わせをした人が他にもいたんだなあと直感した。

→文章のテーマと深く関わるこの文は、「いたんだ」で切って主観的に表現することも可能だが、「なあ」という終助詞をつけてその時(電話)心で思ったことであること(心内語)を示し、さらに発話してはいない内容であることを「と直感した」という後続動詞によって客観的に示している。こうした詳細な叙述の工夫も、文章に特有なスタイルだといえることができる。

2. 2. 2. 『文藝春秋』「巻頭随筆」に見られた引用のタイプ

本節では、「巻頭随筆」の20編というまとまった分量の文章を対象として、特徴的な引用の機能を取りあげ、整理する。(データは付録2参照。以下、例の後の数字は〈付録2〉で示した1～20の作品番号を表す。)

* 「 」の用法について

—書き手の意図と法則性—

(例22) 町暮らしで、食べ頃のビフテキを楽しむ機会も多いはずなのに、アボリジニの友人たちは、そのカンガルー肉を食べながら、「やっぱり食べなれた肉は美味しいよねえ」と、しみじみ言うのである。(2)

→「 」をつけた直接話法の体裁で、文末に「しみじみ」という様子を表す終助詞「ねえ」という表現を用いてはいるが、実際の発話そのものを表現しているわけではない。

(例23) 話題? 雑談しただけである。小泉さんは、(中略)訪中を控え、中国側の日本担当のトップに会ったのだろう。こう言った。「向こうの偉い人(名を秘す)に、日本の新聞では何を讀んでるかと尋ねてみました。産経新聞だ、という返事だった。どーです、朝日じゃなかったんですよ! 産経新聞売れてるでしょ」(4)

→くだけた文体で地の文も談話に近い文章だが、「 」の小泉氏の発話は、本来入るべき直接話法と、「 」は不要であるはずの間接話法の表現が入り混じっている。つまりこのジャンルでは、「 」の有無と引用に際しての話法が必ずしも正確に結びついて用いられているわけではないということが分かる。

(例24) 11月末になって、カイバル峠を越えて、アフガニスタンの首都カブールとバーミヤンに行ってみたいと思い、ひ

どい車にゆられてペシャワールを出発した。(9)

→テキスト全体が書き手自身と一体化したノンフィクションであるため、心内語の引用を「 」によって表面化する必要はなく、内容を端的にまとめて地の文に入れ込んでいる。

(例25) ——ねえ、おい、そこは俺はこう思ふんだが、ねえ、さうだらう、と云ひながら、光夫が武雄の横つ面をピシヤリと張り飛ばすと、張られた武雄も、——そりやまさにおまえの云ふとおりだ、と答へて、光夫の横つ面をピシヤリと張り返へすのである。(11)

→歴史的仮名遣いを用いた書き手の個性が強く現れた文体である。会話部分は、呼びかけの感動詞を用いる等、実際の発話を描写しており、主語や動詞も示されているが、「 」はつけず、ダッシュ(——)と読点によって引用部分を括っている。「 」という引用を明示する符号をあえて避けているという点で、書き手は引用内容と同質化しようという意図が感じられる。

以上から、「 」の有無は、引用部分が実質的か、形式的かだけでなく、書き手の叙述内容に対する解釈や文体との関わりによって選択されているということが明らかになった。

引用部分に「 」を用いず、地の文と一体化させた場合、書き手自身にも元発話の詳細はすでに不明であることが表され、さらに地の文を引用部分と同質化させることで、引用を書き手自身の発話(語り)へと収斂させていく効果も持つ。こうした文体を制御する書き手の力により、読み手は引用を意識することなくテキストを受容することが可能になる。

*文章の中に文章を引用した例

(例26) 太陽の下に新しきことなしとは古人の道破した言葉である。(12)

→格言の引用だが、これは冒頭の一文でテー

マ提示の機能を持ち、引用というよりも自身の言葉として示したいという書き手の強い気持ちから「 」が省略されたものと考えられる^(注9)。

(例27) むろん、けがや体調不全で出席できない事情もあるし、私は以前から「格闘技に怪我はつきものであり、過剰にそれを責めたくない」と公に書いてきた。(18)

→「 」の付いた自己引用であるが、実際の表現のままではなく主張をまとめて提示し、簡潔な文体を形成している。

(例28) 火事があったとして、その原因は何だと思ひますかというアンケートをとって、それで火事の原因を決めたりしたらおかしいことになるだろう。(8)

→アンケートの内容は端的にまとめられているが、敬体表現は残され、地の文とは異なる文体となり、引用が明示されるという形式がとられている。

書きことばを引用する例は極めて少なかった。これは、談話が個人的な営みであるのに対して文章は公的であり、引用は、人間的、個別的、その場限りの作業という特性を持つことによるためであろう。書き手の意図によって「 」は任意に選択され、引用内容については、要約したり、ある程度もとの文体を残したりするなどの工夫が行われていた。こうした引用の方策は、読みやすい文脈の形成にも効果を及ぼすものと考えられる。

*「と」の後に書き手の動作や状況が叙述されている例

(例29) そうか、今年ももうそんな季節がきていたのか、これが咲くと冬なのだと、湯呑の温かさを両手に包んでいる。(16)

→また引用部分には「そうか」「～か」といっ

た感動詞や終助詞がみられ、本来の発話に近い自己引用である。また、身辺雑記というジャンルの特性を反映しており、地の文と一体化した書き手自身の声であるので、「」もない。文章内容と表現方法が相関関係を持つ例である。

引用部分の後に「言う」や「思う」以外の具体的な行動を示す動詞を配し、発話状況や内容を詳述する例は、談話がしばしば「って」で終わり、その後の引用動詞が省略されるのと対照的で、文章特有の用法といえる。

* 読点の位置（「と」の前に読点が来る例）

橋本文法においては、「と」の後に読点を打つという文法解釈が行われるが、時枝文法では叙述内容の「詞」をまとめ、それに付く「と」の前に読点を打つという文法解釈が行われている。後者の例は少ないが、ここではこのタイプを挙げ、文章における機能を考えてみたい。

（例30）すると小林はいろいろ私の誘いに応じた挙句、君はやはり松蔭がいいよ、とボソリといった。（15）

→「」のないこの文章では、「と」は他者の言説を引用しているという標識として機能しているが、その前に読点を打つことで、引用内容は自分のテリトリーの外にある、つまり他者のものであるという書き手の意図が示される。またこの読点は、談話における間やフィラーなどに相応するものと考えることができよう。

3. 談話に見られる引用の諸相

本章では、「談話」をコーパスとして引用の様相を観察するが、談話資料全体を通して、どこからが引用なのか、また誰の発話の引用なのかははっきりしない場合でも、聞き手は雰囲気理解したり、話の筋に問題がなければ、いちいち詮索しないという特徴が観察された。これ

は、談話に特有の、話し手と聞き手が共有する同一の「場」が持つ効果であると考えられる。以下では、こうした談話データの分析を行う。（データは〈付録3〉を参照。用例の後の英字はデータの種類を示す。）

* 談話における自己引用の用法—「婉曲化・臆化」の技術—

談話では、自己の意見や主張を「って（と）」で引用する例が極めて多く見られたが、こうした自己の意見を改めて引用の形で明確に提示することは、表現を和らげる、引用内容を捉え直すといった機能につながっていた。本来、引用をつかわなくともいえる自分の言表をあえて引用の形で提示するということは、前述の通り、相手と場を共有しているために発生する、ポライトネスや配慮を示す談話のストラテジーと見ることができる。

（例31）でもね なん 詰め込まなくちゃダメ
だと思ふよ ある時期（B）

→本来、引用は離れた内容を引いてくるものであるが、ここでは自己の意見という最も近いものを引用している。断定表現を避けて引用によって控え目に提示することで、相手が自分の発言内容をすんなりと納得してくれることや、会話が円滑に進むことを期待している。

（例32）あ：こうやって表現ていうのはおぼえていくんだなって [言って]（A）

→自己引用の後の「って言って」（「といって」）は後に休止を伴い、自分の表現した情報内容を自ら改めて確認するといった機能を持っている。

（例33）国語科の人ちゃんとわかってるなって
感じる。（C）

ないってなんだよって感じじゃない？
（C）

→自分の考えについて、引用の必要がないのに

も関わらず「って感じ」を付け、「というニュアンスを持つ」という意味の形で引用して主張を柔らげている。

* 「っていうか」の用法

「っていうか」は最近の若者の談話を中心に見られる言い回しで、今回のデータには21例見られた。話者がより適切な表現を探しあぐねて考えているときの時間稼ぎや、前の話題に後の話題を関連づけたいときなどに用いられ、フィラーに近いが、フィラーまでは進化していない表現だといえる。以下の例34、例35でも、直後に「たぶん」「あの」といった考えを示す前置きとしての表現が置かれている。本来は、「と言うか」「あるいは」の意味であるが、こういった意味さえも特に持たないメタ言語的機能を持つこともある。

(例34) っていうかたぶん 自分が持ってる：：
既存の価値観を崩すような何かに出
会ったときに： あのとまり自分 自
分の持ってる あ：価値観がくずれそ
うなほどやばいってことでもって (D)

→「っていうか」は、引用内容を明確に主張したいと話者が考えた際に、同じ内容を繰り返しながらそれを柔らかにアピールするために用いられており、ここでは、そのあとに引用内容の補足の叙述が続くという構造となっている。よって、言い換えの機能というよりも、引用内容に関連付けてやんわりと強調する機能だといってよいだろう。

(例35) 年寄りにはわからないだろうって そ
れ それでこう こう仲間の間の あ
の連帯感を確かめるっていうか あの
小さいコミュニティの中でそれを確か
めるっていう効果が 結構あって だ
からその意味ではそうなのかなって思
うんだけど (B)

→この場合は他者の発言（年寄りにはわからないだろう）を自分で解釈し、さらにそれを詳

しく説明している。よって、「AというよりもむしろB」という意味ではなく、「Aでもあり、そしてもっと分かりやすく適切な言い方でいうとB」といった意味で用いられている。ここでも、「っていうか」の前の内容を排除するのではなく認めているのであり、前後は同一内容を表現を変えて言っているだけなのである。

* 文末の「って」の用法

談話では、「って」で文末を切り、引用動詞や主語を省略する例が多い。それは、談話では、スピードやトーンを変化させるだけで、本来引用動詞が請け負うべき情報が与えられるためであろう。さらに談話は、聞き手の反応を常に確かめながら進められるため、話者は必要と判断される場合にのみ言語情報を与えればよく、不必要な情報は極力削りとられることも影響していると考えられる。以下では、こうしたことを踏まえ、談話の文脈から理解される機能を見ておきたい。

(例36) ……なのそれは 子供に対していいの
これでって (A)

→これは、街で聞いた親子の会話（母親が子供に、大人に話す口調で話しかけること）に対する話し手の感想を述べている例である。「これでって」という文末は終助詞的でストレストーンを伴う。先行研究では、「相手を突っ放す」「ぞんざい」「自分の気持ちを放り出す」といった用法が指摘されているが、それよりも、自分の意見を引用の形で提示して説明的にすることで明確に自己主張を行う、また「思う」などの後続動詞を省略することで、聞き手に考える時間を与え、発話内容に説得力や客観性を増す機能が認められる。更にここでは、話し手の「意外」「驚き」といった心内状況も示すといった複合的な機能も持っていることが分かる。

(例37) そんな凝ったの絶対考えられないん

だって。(C)

→これは、「そんな～考えられない」という否定的命題について、確信を持って主張をするという話者の態度を「って」によって表出している。こうしたケースでは、「ってば」「ってさ」「ってよ」などの形で終助詞を伴うことも多く、話者の心的態度を示す標識としても機能している。

(例38) そのレジのおばさんだかお姉ちゃんが連発するのはね 大丈夫ですかって言うのね たとえ ば あ の袋ひとつで大丈夫ですかって そんなのこっちの知ったこっちゃねよなあ (h) お前が決めろって (B)
あ：これは知らないんだと 彼らは使えないって つまり言い換えの言葉って言うのは 知識がなきゃだめでしょ (B)

→(例38)の最初の「って」は他者引用で、これは直前の同じ表現(大丈夫ですかって言うのね)を繰り返すことを避けた談話のスピード性に基づくもので、伝聞情報の転送と共に、引用部分の内容のみが強調されて示される形となっている。2番めの「お前が決めろって」は、文体の逸脱を伴う心内語である。またこれは「(私は)言いたい」の後続部分を省略した言いさしの形で、談話内容に登場する人物に対する話者の非難の気持ちも示されている。くだけた態度で自分の意見を表明することで、聞き手の同調や同意を期待しているが、そうした期待は明示されることはなく、むしろ相手へ配慮するように曖昧に提示される。さらに3番めの「知らないんだと」は、論理的な説明(知識がないとだめだ)を伴い、文体が硬めにシフトしているため、同一の話者の談話ではあるが、「って」ではなく、「と」が用いられている。

*「とか」の用法—並立からの派生—

「とか」はもとは並立の意味で用いられてい

たものが引用を示すようになり、そこに他の機能が加わっていったものと考えられる。談話では、引用形式を用いることによって、他者引用ではとりたて、自己引用では和らげという異なる機能が観察された。

(例39) だからうちも 下の子のほうがね：

しゃべるの早いとかって言う (じゃんお姉ちゃんの影響)

だから子供がすぐに勉強嫌いだからとか (言って好きな) ものだけ与えて (A)

→引用された「下の子のほうが、しゃべるの早い」「勉強嫌いだから」という言葉は実際には存在せず、一般的に言われている事柄を話者がその場で言い換えた表現で、引用形式が、その内容に焦点をあててとりたてる機能を果たしている^(注10)。

(例40) だからNHK教育って偉大だなあとかね (A)

→本来、自分の意見提示には必要のない「とか」を付加して引用の形をとり、他にも何かあるという含みを持たせた曖昧な言い方をし、聞き手を気遣う表現となっている。

*談話において引用の「と」を連発する用法

文章では、「と」が比較的まとまった叙述を受けることが多い半面、談話では、場合によっては省略可能であるにも関わらず、「と」を連発し、短い部分を受ける例が見られた。これは、談話の多くが引用によって構成されていることや、談話の文体的特徴を示すものといえる。

(例41) そのやっぱり2歳まで↑：だから1歳から：1歳までっていうのもやっぱりためてって。1歳から2歳にその爆発的に：やっぱりその言語を獲得していく：時期があるんだって。(A)

→一人の話者が話すにしては、長く、説明的な内容に、適宜「って」をおりまぜている。文

末の「って」はいずれも他者引用だが、伝聞の情報元は同一であり、「って」で文を切る必要はない。短い情報を連続的に発信する談話のスタイルとして用いられている用法である。

(例42) 駅でもさ： 危ないですから あの黄色い線の内側って言ってるけど あのいつもこれ違うぞって思ってるのね (駅で)

うん で 西船橋は危険ですからっていうから あ これは正しい と 危ないですからじゃあ 何て言うのかって学生に聞かれたんだけど (B)

→これも、談話の大部分が引用で構成されていることを示す例である。

4. 「という」という複合辞をめぐる

「という」をめぐる形は、文章（現代語の随筆）の引用267例中、「という＋名詞（相当句）」が109例、「という」が36例あり、談話の引用437例中、「という＋名詞（相当句）」が91例、「という」が53例と、極めて多数見られた。ここから、これは引用の中心的な用法であるといえることができる。そこで本節では、特にこの表現を取りあげて、その特性について考えてみたい。

4. 1. 「という」という複合辞の先行研究

藤田（2006）では、複合辞とは「いくつかの語がひとまとまりになって、そのひとまとまりが固有の『付属語』（辞）的な意味を担うものとして用いられる形式」とし、これに関わる問題として、もともと「内容語」であったものが、しだいに実質性を失って「機能語」化する現象である文法化（grammaticalization）を挙げている。さらに砂川（2006）は、「言う」を用いた複合辞の一つとして「という」を取りあげ、「『言う』という動詞の持つ実質的意味を失い、『と』と結びついた『という』の形全体で、属性を表す節とその節が修飾する名詞とを

結びつける機能語へと変化したもの」と考えている。

これらはいずれも文法的な視点から「という」を分析したもののだが、本稿では以下、文章と談話に見られる「という」の機能についてテキスト分析の視点から考えてみたい。

4. 2. 文章・談話における「という」の用法 *文章における「という」の例

(例43) 従軍派がなぜ家康に心をよせ、かつ家康が巧まずして従軍派の上に乗ったか、またなぜ家康が一見無策でいるかのように見えて隈なく彼らの心をとったか、という機微については、数行では書き表せない。(17)

→広い範囲をまとめて後続する名詞（この例では「機微」）に収斂して評価付けを行うといった、叙述内容の焦点化が行われている。この例では、長い引用部分直後の「と」の前に打たれている読点も、この「まとめる」機能を助けている。

(例44) それは中国あるいは日本の書などに対しての親しみの度合いが急に進展していくと言う、思いもかけない動きであった。(3)

→「という」の前後は同じ現象を指しているが、前の説明を「思いもかけない動き」と端的に捉えなおし、表現方法の質に差が出ている。これは「という」が持つまとめ上げの機能でもあるが、先に具体的内容を提示して十分な理解を促し、その後で内容を整理するといった「情報管理」の手法の一種と見ることができる。

*談話における「っていう」の例

(例45) さっきそのほら あの言葉がって言うか子供がねっていう話をしてたじゃない。(A)

→「という話なんですが」と自分にひきつけて言う機能。ここは、「言葉や子供の話をして

いたじゃない」でもよいはずだが、「っていう」が自分が話者として話を開始する合図となっており、この場合は談話特有の「順番とり」の機能をも果たしている。

(例46) お母さんと子供の会話じゃないの。
どっちかっていうと う：：ん た
に、他人の：なんか みたいな それ
が怖い：っていうのはある (A)

→自己主張を強調し、聞き手に受け入れてもらうために、引用によって妥当性や客観性を付与している。引用形式によって主張の客体化を装う例である。

(例47) まあ でも こと 話し言葉っていうのは だいたい いつも乱れているものではあるわけでしょ？常に (B)

→「っていう」が「の」に収斂し、叙述内容を抽象化しているが、この「っていうの」は省略が可能である。「っていう」の形で主題を婉曲に提示することで、後に続く自己の主張を和らげる緩和表現となっている。

(例48) ねえみんな：一緒に遊ぼうよ：なんて、今時そんなしゃべり方だれもいね：ちゅうの (A)

→コミュニケーションストラテジーの一つとして通常文体を逸脱する（乱暴な言葉を用いる）ことで、自分へのつつこみや非難、ちゃかしなどの話者の思いが込められている。自分の発話を相手にやわらかく、面白く伝え、話を盛り上げるための文末表現として機能している。

4. 3. 文章・談話における「という」の機能

文章・談話の両方において、「という」は、引用することで改めて注目を与える効果を持つ。これは、「という」が省略可能である場合でもあえてこの形を用いることによく表れている。文章では、引用した内容について書き手の側の捉えなおしや再認識、判断や評価といった

意図がこめられる複合辞であり、これまでに指摘されてきた「ぼやかし」などの用法・意味合いだけにとどまらないものであることが明らかとなった。また、読み手を自分の側に引き付ける書き手による「情報管理」の働きもある。これは、2.2.1.でとりあげた「わたしはそういう物欲の形を『千円贅沢』という本に書いた」の例のように、読み手にとって未知の可能性がある情報について、読み手への配慮も含めて「という」といったマーカーをつける場合などがそれにあたる。

一方、談話では、表現の緩和が中心的機能であるが、複数の人々の間での順番とりや、客観性の付加、特に自己引用の文末において表現を豊かにするコミュニケーションストラテジーの方策として機能している。

5. まとめ：文章・談話における引用表現

本稿では、文章と談話に見られる引用について、助詞「と」と「など」の様相を中心に考察を行った。

文章においては、書き手と読み手が同一の時間空間を共有していないため、いかにして臨場感や読みやすさ、分かりやすさなどの折り合いをつけるかが大きな課題であり、それに向けての様々な引用方法の工夫が見られた。一方、談話は、声色や口調、イントネーションなど音声を伴い、生き生きとした描写は可能であるものの、話し手は聞き手との「場」の共有を前提とすることから、聞き手への配慮と関連した引用表現が見られた。

引用表現自体については、まず、文章・談話ともに、引用部分では発信者の叙述内容に対する解釈の仕方が反映され、判断や意図が加えられていることが分かった。この手法は、主として婉曲化や臆化を狙っており、これは、日本語の言語的・文化的特性とされる曖昧さにつながっていて、直接的な表現を忌避する手段ともいえる。とくに談話では、その出所を抽象化して一般化する、また特定の人物の発話を一般的

な人々の見方や考え方にすりかえ、「って」で文末を終える例が見られた。これは談話における引用は文章に比べてゆるく、出所を具体的に示すことは求められない傾向に因るものと考えられる^(注11)。また文章では、もとの発話を大幅に変形し、引用者の解釈した内容に変形して簡潔にまとめ、引用の体裁をとってとりこまれることが多かった。

さて、文章の引用の特徴としては、まず古典随筆である『枕草子』の引用については、「など」と「と」を中心にその機能を観察したところ、両者は異なる特徴を持っていることが明らかとなった。「など」は、書き手が情報（叙述内容）を自分のものとして捉えなおしたり、臆化の含みも持たせたりして用いる、潜在的な引用の方法だといえ、「書き手にそう感じられた」などの判断によって引用内容が比喩的に提示される例もみられた。また古典作品には「」がないが、当時は同質社会であり、発話者は主語がなくても特定できるため、書き手自身が話法を意識することはなく、これが潜在的な引用表現となって表れているのではないだろうかと予想される。現代語では引用の格助詞は「と」に一元化するが、「など」が担っていたこの潜在的な引用の手法は、「」の非用や地の文との一体化につながっていると考えられる。また『枕草子』では、章段に応じた引用の手法も見られ、類聚的章段においては「名詞句＋と」の形で引用内容をまとめあげる機能が多く、それに書き手の感慨を続けるという形式が多数あったほか、日記的章段では「と」という直截的に引用する会話をつなげる展開によって文脈の流れをよくし、臨場感を出すといった表現上の効果が見られた。

次に現代語の随筆については、引用において「」の使用は任意であり、その選択判断は文章内容の特性、書き手の引用内容に対する解釈、文章構造などが複合的に絡み合っとなされていた。また引用部分の叙述についても、もとの文体をどの程度残すか、内容の変形をどの程度行うかもまた、書き手の判断に基づくものだ

といえる。さらに表記の問題として、「と」の前後の読点の使い分けは、談話における声の調子や間といった表現方法に相当し、引用内容の焦点化に寄与する他、ひらがなと漢字の使い分け（例：いう・言う）は引用内容が形式的か否かにとどまらず、むしろ書き手の引用内容に対する姿勢に基づくものだということが明らかになった。

談話においては、自己引用が多用されており、談話の「場」を尊重し、聞き手への配慮が反映される場合が多い。本来、引用とは他者の言説、もしくは自分の言説でも現在性のない場合に行われるものであるにも関わらず、言い切りが可能な現在の話し手の意見や主張をあえて引用によって提示する手法が極めて多かった。また、談話における「って」は、引用のほか、伝聞や主題導入、主張などの複合的な機能を担っており、間接性や丁寧さを高める、円滑なコミュニケーションに寄与する効果を持つ。

文章と談話との比較としては、文章では「」によって引用開始部を明示し、格助詞「と」で受けた後に具体的な動作や状況を説明する形で引用が行われるのに対し、談話では「って」で文末を切り、聞き手に引用開始部や引用元の発話者などの判断を委ね、さらに「って」自体に先に述べた様々な機能を付加させていた。また、文章では「と」が引用部として受ける部分が広い叙述に広がっているタイプが多いのに対して、談話では「って」で短文を連続的につなげていく形が多く、これは談話における引用の多さと談話特有の文体によるものと考えられる。

このほか、文章・談話には「という」形が多く見られ、こういった文法化（grammaticalisation）の現象は、引用という視点からも見て取れることがわかった。文章では、おもに内容のまとめあげや焦点化、情報管理の機能があり、談話では主張の客体化、緩和表現、また順番取りなどを目的として用いられていた。

以上のように、今回は随筆というテキストと談話との比較という視点で分析を行った。随筆は人間生活の現実をダイレクトに文章にしてい

く内容が中心で、読者もそれを求めているといった談話的な傾向が強いジャンルではあるが、引用という視点から観察した場合、随筆には文章特有の性格が表れていた。今後は他の文章のジャンルにおける引用の様相について調査を行い、日本語の文章・談話における引用の様相について更に考えていきたい。

注

- (注1) このほか、文章と談話は、受信者の側からは「読み言葉」と「聞き言葉」という区別もでき、前者においては音声を伴うか否かによって「音読」、「黙読」という違いを認めることもできる。
- (注2) 『日本国語大辞典』による。また、市川(1978)は、文章の一般的性質を規定する条件として、以下の二点を挙げている。
- ・通常、二文以上からなり、それらが文脈をもつことによって統合されている。
 - ・その前後に文脈を持たず、それ自身全体をなしている。
- (注3) 但し、学問の世界では、近世頃からは書き言葉をベースとした話し言葉が通用されるようになり、その具体例としては、江戸時代の「講義録」や、手控えである「抄物」などがある。
- (注4) 鎌田(2000)は、語用論的視点から引用句創造説を唱え、日本語の引用表現は、もともとのメッセージを新たな場においてどのように表現したいかという伝達者の表現意図に応じて決まるものだとしている。
- (注5) たとえば文章では、「」が引用を示すため、「と」を伴わない引用形式も見られる。
- 例：早めに出勤し、片っ端から電鉄の駅長室に電話した。「人出どうでっか？ 普段の何割増し？ 家族連れ？ 行き先は？ さよか。おおきに」出勤途中に見上げた空模様を重ね合わせ、日曜夕刊社会面のトップに仕立て上げた。(随筆4)
- (注6) 竹村(2003)は、宇治拾遺物語における伝承性の形骸化や説示性の希薄化として、そこでの発話が<他者のことば>の単なる伝達ではなく、これに応答したり対話したりする中でそれを現在化する傾向をもち、<他者のことば>の意味の理解がただ一つの世界観や価値像に依拠したものとなっていないことに由来するとを指摘するが、これはそれが『枕草子』においても観察されるという見解である。
- (注7) 但し『枕草子』の談話に着目した研究例としては、竹内(1995)がある。
- (注8) たとえば『枕草子』第六段「大進生昌が家に」

における、「あけんとならばただいねかし。消息をいはんによかなりとはたれかいはんとげにぞをかしき。」といった筆者のコメント部分では、「よかなり」だけを「」とする場合と、冒頭から「いはん」までを「」とする場合との両方の解釈が可能である。

- (注9) これに対して、談話における格言の引用では、「っていうかね」と曖昧に提示して比喩的に用いる例が見られた。例：過ぎたるは及ばざるがごとしっていうかね。
- (注10) メイナード(2005)では、こうした表現を「想定引用」とし、「架空の話し手の声を利用して引用者自身の発想・発話態度をより豊かにする手段」だとしている。
- (注11) たとえば「講義の談話」というジャンルでは、単に「～といわれています」で済ますことが慣例化しており、これは一種の文化ともなっている。他にも、テレビの健康番組などで、テロップの内容(文章)と本人の話している内容(談話)とを微妙にすり変える(過大な一般化など)といった例もある。これは、書き言葉の引用がきわめて厳しいものであることとは、対照的である。

参考文献一覧

- 市川 孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 大野晋他(1977)『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』岩波書店
- 鎌田 修(2000)『日本語の引用』ひつじ書房
- 砂川有里子(1989)「引用と話法」『講座 日本語と日本語教育4 日本語の文法・文体』明治書院
- 砂川有里子(2006)「「言う」を用いた複合辞—文法化の重層性に着目して—」藤田・山崎編(2006)所収 和泉書院
- 竹村信治(2003)『言述論—for 談話集論』笠間書院
- 竹内美智子(1995)「『枕草子』における談話—定子中宮・清少納言を中心に—」『日本語学』14(2)
- 橋本進吉(1969)『助詞・助動詞の研究』岩波書店
- 藤田保幸(2000)『日本語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸(2006)「複合辞研究の展開と問題点」藤田・山崎編(2006)所収 和泉書院
- 藤田保幸・山崎誠編(2006)『複合辞研究の現在』和泉書院
- 松尾 聡・永井和子校注・訳(2007)『新編日本古典文学全集18 枕草子』小学館
- 松村明他編(1969)『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- メイナード・泉子(2005)『談話表現ハンドブック』くろしお出版
- 『国語学大辞典』(1972)小学館
- 『日本国語大辞典第二版』(2000)小学館

〈付録1〉「秘密のコレクション」全文

〔『文藝春秋』80(1)(2002)巻頭随筆 p78~p80〕

秘密のコレクション

中野 翠
(ナノ スズ)

一枚の綿のハンカチーフがある。
数年前に上野に行った時、路
地裏のシルク専門店であつた
ものだ。自地にバンダ(六厘)
と毎の葉の手刺繍がしてある。
四辺は小さな丸型のスクラップ
刺繍でふちどられていた。
優美な花刺繍の刺繍ハンカチ
ーフがところどころある中に、この
バンダのハンカチーフをあつた
時は、頭が血が二、三本切
れたんじゃないかというくらい
興奮した。
店にあるのを全部(と)言つて

も六枚きりだつたが)買い占め
た。一枚千円以下だつたから、
たいしたことはない。今は、や
つぱり同じ店で買ったバンダ刺
繍のボーチに入れ、和ダンスに
びそませ、時々取り出して眺
めてウットリしている。一枚
は、わざわざ銀座・伊東屋で正
方形の箱をあつらえて壁に飾つ
てある(と書いて、今、ハッと
気がついた。結局、中身のハン
カチーフより箱のほうが何倍も
高いのね……)。

白と黒と緑の配色の美しさ、
シルクに手刺繍の質感、そし
て、バンダのフサフサな柔らかさが
私の胸を震わせる。
そこで、フサフサな柔らかさと
いふのが、私の場合は重要な
だ。ただ綺麗だつたり高級だつ
たりする物にはだいたいして惹かれ
ない。そこにちよつとフサフサた
虚しさ、トガフサな感じ、ほかほか
しい感じが加わると、突然、激

しく惹かれてしまうのだ。
確かに物欲は強いほうだと思
う。ただし、今風の物欲は業界外
一流ブランド熱はほとんど無
い。もろに「草履」「蓑沢」「リ
ッチ」「ゴージャス」という感
じがして、私には妙に取つきし
い。たぶん人間が草履ではない
せいでと思う。ついでにいけな
いのね。私はそういう自分の物欲
の形を、『千日蓑沢』(藤沢社
01年秋に出版)という本に書い
た。

もう二十年ほど前だが、近所
のセトモノ屋(今や売却済み)に
熱中したことがあった。セトモ
ノ屋としては随分になつたなら
しく、店先で食器や織物等を売
つていた。その店の奥に、数年
店師になつていたとおぼし
き、茶碗など、はん茶碗の数が
ずば抜けたのだ。茶碗の装
飾が、50年代のモダンアート風
で、何ともポップな感じ。さらに
イイのが子ども用の茶碗で、

雅馴なタッチで赤黒銅の彫やサ
ンタクロースの絵が描かれてい
たりするのだ(サンタクロースと
脇に書かれていたのが、いじら
しい)。

「キッチェよね、かわいよ
ね」と友人と狂喜して、何十個
となく買い込んだ。店の人は
「持つて行てくれるだけあり
がたい」というようで、タダ同
然の値段だったのだ。

こんなほかほかしいものに愛
着をやすのは私たちくらいのも
のだと聞いて、それがまた楽しか
つたのだが……世の中には、や
つぱり一定数、ものずきはいる
らしい。いつのまにか、昔の子
ども茶碗はコレクターズ・ア
イテムになつてしまつた。今や
東京市などでは千円以上。人気
マンガの絵だと三千円なんてい
う値段がついている。

ちなみに、私はちよつと占
けてしまふ。安物のかわいらし
さが失われたようで、つまらな

い。飾りがある。他の物と違
いがあつて行。
そんなふうに、今までも
いろいろな物に手を出して来た。
多くは草書やアンティーク・シ
ョップ(というより道草屋と
言つたほうがいいか)であつた
もの。テラコッタのデザイン
のあるもの、スマイリー(ハッピ
ーフェイス)のデザインのある
もの、モルル人形、うちわ、縁
前昭和のもの、みやげ物の貝
細工(海外輸出仕様のもの)、
羽子板(おもに、じかに絵が描
かれたもの。押絵の場合は日本
製ではなくオカッパ頭の少女の
絵柄のもの)……など。
どうでもいいようなものはか
りだ。古いものが多いけれど、
白洲正子さんの世界からはほど
遠く、エフの「なんでも鑑定
団」の世界からもズレている。
中野半端。
服の対象はかりではなく、
数においても中野半端だ。半本

的に、コレクションにしよう
という気がないのだ。何となく集
まつてしまつたというのが好き
で、努力して集めようとは思わ
ない。
ただ一つ、少し意識的に集め
ているものがあるのだけれど、
それはまだ「こんなほかほかしい
ものに愛着をやすのは取くら
いものな」と思つていたら、い
つの間にかコレクターズ・アイ
テムになつてしまつた様子なの
だ。近年めつきりみつけないく
なり、なおかつ値段が高騰。ど
うやらコレクターの世界も疲
れて来ているようで油断がなら
ない。さらに相場を上げるのも
シヤクだから何のコレクショ
ンかは、かくしておきたい。
三年前に上野裏に行つた時、
一軒のみやげ物屋のガラス戸
越しに私の眼に求むる物がたくさ
ん並んでいた。事だのもつか
ぬ、そのガラス戸は固く鍵で
閉ざされていた。明かりも消え

ていて、休業中の様子だつた。
店の電話番号を確認し、電話
で聞いてみたら、店はやめるこ
とになつてはいるのだが、商品は
手放す気はない、見せる気もな
い——と言い切られてしまつ
た。ガックリ来た。私と同様の
問い合わせをした人が他にもい
たんだなあと思感した。
いまだに時とき、そのガラス
戸の店を思い出し、小さな悔
みをついている。

〈付録2〉『文藝春秋』 巻頭随筆 2002.1-2 (80) 1・2号 (約960文)

データ 番号	題 名	筆 者	性別	職業	ジャンル
1.	牧師志望が社長に	池田守男	男	資生堂社長	自伝
2.	美味しい牛肉と不味いカンガルー肉	上橋菜穂子	女	作家 川村女子短大講師	随想
3.	君子の「道徳観」に支えられて	ロセイコウ	男	書画家	自伝
4.	夕刊やめるべし	徳岡隆夫	男	ジャーナリスト	ノン
5.	奇妙な符号	小野光則	男	塩野義バイオ社長	随想
6.	長すぎたイタリア	豊福知徳	男	彫刻家	自伝
7.	夢のゆくえ	土岐迪子	女	演劇記者	ノン
8.	「誤認逮捕」32年目の核心	祝康成	男	ノンフィクションライター	ノン
9.	アフガニスタン	南條範夫	男	作家	ノン
10.	殊儒の言葉	芥川龍之介	男	作家	随想
11.	老若問答	辰野隆	男	フランス文学者	自伝
12.	君徳座談おぼえ書き	小泉信三	男	日本学士院会員	歴史
13.	多数決	田中美知太郎	男	京都大学名誉教授	意見
14.	ひとり旅	正宗白鳥	男	作家	紀行
15.	松蔭と私	河上徹太郎	男	評論家	歴史
16.	小川のほとり	永井龍男	男	作家	随想
17.	この国のかたち56 家康以前	司馬遼太郎	男	作家	歴史
18.	横綱の重み	内館牧子	女	脚本家	主張
19.	メールマガジン発刊の手引き	池澤夏樹	男	作家	説明
20.	ご退院	八木貞二	男	元宮内庁侍従次長	歴史

(ジャンル設定：ノンフィクション・主張・自伝・紀行・随想・歴史・説明)

〈付録3〉

談話データは4種類で、その内容や詳細は以下の通りである。

A：900発話 40代女性4人 雑談 子供の言葉の発達について

B：800発話 50代男性 40代男性 30代女性 雑談 若者言葉の乱れについて

C：957発話 20代男性4人 学部キャッチコピーの作製

D：864発話 20代女性4人 学部キャッチコピーの作製

本研究は2007～2009年度科学研究費補助金(基盤研究C)「言語行動としての広義引用表現の研究」(研究代表者 高崎みどり)の一部です。